

建設

足立石灰工業株式會社
川上清

地方経済

社章



足立石灰工業（新居町厚志）

昭和十五年の創立だが、戦後三十年まで社章はなかった。このため三十年後、川上清が、社のシンボルがなぐさし、考案した。社名でもあり、立地名でもある足立（あしたち）を象徴化。四田が企業、従業員をあらわし、がっちり二本足で外田の大地に足をさしている様子を描く。同社は岡新地方の無灰炭の石灰石の産地、生石灰、漂白灰、地土販売。



第一次建設



故郷遠く備中の里や雪に暮れ

伯備線の汽車に揺られ、高梁川を上ること三時間。見渡す限り雪野ヶ原のこの足立に、はじめてたゞ一人はるばる九州より入山したのは昭和十五年の一月であった。

足立着任第一歩。

此処は人呼んで岡山県の北海道だとか、流石に寒い処である。汽車から降りた途端に耳が、手が冷たいというよりむしろ痛い。足立駅で駅長さんに『今朝は零下十八度ですよ』と聞いて二度びっくり。九州育ちの私は一度に体中の血が凍りつく様に、思わずゾッと寒くなった。

今だに思い出しておかしくなるが、炬燵におはいるなさいと言われて、炬燵を知らない私はまごまごして、吉森旅館のお内儀さんに笑われたのもこの朝であった。

雪に覆われた山里、高梁川の支流西川に沿って

民家五十戸、人口二百余り。之が当時の足立の全景であった。

* * *

地を測る異郷の空やまた吹雪

ほんとに最初の草を分け、雪をかきわけて測量をはじめたのが二月の初めであった。積った雪、凍りついた雪の上にまた更に雪が降る。折角打った測量の杭が雪のためにわからなくなる。雪のためには当時の測量は随分なやまされたものであった。それに困ったのは測量の手伝いの人びとがみんな素人ばかりで、ポールを握った事もない、テープの読み方もわからないという様な人達ばかりだったので、測量がはかどらない事おびた。何時も測量を終えて帰って来るのはきまって日が暮れてからであった。

* * *

音もなく硯の水の凍りけり

当時の事務所は峯森商店の前の家であった。私はこの事務所の一部屋で丁度二年の間一人で寝起きた。

当時は所謂計画時代であつて、当初の仕事としては測量、計算、製図、設計等である。日が暮れるまで測量して帰る。夜計算をする。深夜になつて製図をするというのが当時の日課であつた。そして寝むのは何時も夜半の二時か三時頃であつた。あの年の冬はほんとに寒かつた。日が暮れると物凄く冷える。今迄の足立生活をふりかえつて見ても十五年の冬ほど寒かつた年は一度もない。

夜更けてことごとく音もなく凍りついて行く頃製図をはじめ。お湯で墨をすつて製図をしたものだが、何時の間にかすっている墨が忽ちガリガリと硯に凍りついてしまう。しかもそれが温い炬燵の上で 之には私も全く面喰つて今更ながら足

立の寒さに胆を冷したものであつた。

* * *

梅桜桃といつしよに春が来る

雪の足立にもやがて春は訪れて来た。

梅も咲いた。桃も咲いた。そして桜も咲いた。しかし九州育ちの私は、梅と桜の花盛りは一月以上も季節が違ふものと思つていたのが、冬の長いこの辺では春の氣候が非常に遅れて、ほとんど同じ頃に梅も桃も桜も花が咲く。面白い現象だと思つた。

足立の春はほんとに短かい。やがて夏が来る。

此の頃大体の測量も終えて、設計や対外関係の手続等に忙しかつた。足立には半分も居ないほどあらこらと出張に飛び廻つたものであつた。

資料獲得のため社長が老軀をおして上京され、七十有余日を東京駅の鉄道ホテルに籠城して頑張られ、其の間私も図面、書類をひっさげて二度も

三度も東京に馳せ参じたのもこの夏であつた。

鉄道ホテルに滞在中、一すうっかり部屋を留守にした瞬間泥ちゃんに見事財布ぐるみ盗まれて往生し、社長に「田舎者は困るね」と言つて笑われたのもこの時であつた。

* * *

地鎮祭起工の原や菊かほる

測量もすんだ。

設計も終つた。

対外手続も完了した。

資材、器具も備つた。

起工式！

計画より実現への大いなる歩み。今日この日を幾日待ちわびし事であろう。

起工と地鎮めの式を正面の現在の貯石槽の真上の処で挙行して、社長自ら鍬をとられて大自然の大地に挑む最初の一撃を掛声もろとも振り下され

たのは十五年の秋、菊かほる十月十七日、秋の日ももう余日ない頃であつた。

緊要一番。建設への第一歩。

大いなるスタートは切られた。社長以下全員の眉宇に此の時ほど引締つた表情を見出した時はないであらう。

* * *

側線を夢見る畑に霜をふむ

愈々工事開始。先づ西川よりコンクリート骨材採取をはじめにコウモリ原住宅地整地工事等々……。鉄道側線工事を請負つて大阪より鹿島組も乗込んで来た。

愈々機は熟した。そして工場建設の先陣を承つて側線敷地切取工事の最初の鍬を打下したのが十一月の末、正確に言えばおく霜白き十一月二十一日の朝であつた。

行き交う村人達の噂にも、寄るとさわると工場

建設の噂に花が咲くのを聞きつゝ、昭和十五年は静かに暮れて行った。

* * *

いろり火や外は吹雪か雪見酒

希望に暮れて希望に満ちた昭和十六年は降り積る雪に静かに明けた。年越しに降り続く雪。それは去りゆく年のすべてを清算するかの様に……。

屠蘇の香新たな二日も雪。三日も四日も五日も……。止むを知らぬ降り続く雪に流石に中国山脈の頂き近くに位する山里の感じを一層深くした。この辺では一月は正に冬ごもりの期間である。

村の人達は決してあわてない。雪が降ったらのんびりと、いろりや炬燵にあたって、正月気分も新たに窓越しに降りつもる雪をながめては、チビリチビリ雪見酒でも飲んでいる。

折角張り切って着工した工事もこの雪に阻まれて遅々としてはかどらない。しかも一月、二月と

日々零下十幾度の酷寒と苦闘しつゝ、雪の衰えるのを待って本格的に工事の進捗し出したのは三月であった。

三月攻勢！

本格的工事推進の前衛として、工事事務所（現在の事務所）を建て、峯森商店前の仮事務所より移転したのが三月のはじめであった。

この頃一方貯石槽工事の準備は進み、側線工事の鹿島組と対抗して直営工事として着工することになり、住宅建設のために大阪より乗込んで来た川西組が、統領川西氏陳頭の下に貯石槽より側線に至る間、高さ十米に及ぶ棧橋工事に着工した。

直営工事着工の前には致る処関係が多かった。先づ最初の難関にぶつかかったのがあちこちに無数に点在する墓地であった。墓地移転については度重なる交渉にもかゝらず「私等はいかまわぬが先祖の霊が……」などと異口同音に唱えての反対があった。社長はじめ部落有志の幾度とない

根強い交渉、会合によって、共同墓地を新設して

墓地移転の話が漸くまとまったのが二月も余日ない頃。足立小学校上の現在の共同墓地を整地して、之に通ずる道路を新設したのが漸く三月の末であった。

再びめぐり来る春四月。桜のつぼみのふくらむ頃先祖の御霊安かれと瞑しつゝ、墓地は掘り起され新たなる墓地へ、共同墓地へと次々に移転されて行った。

正に難関突破、思えば苦心した墓地の移転ではあった。

* * *

締切りをまた流さるゝ五月雨さつきあめ

墓地移転が完了してやれやれと一息つきたい頃、川西組によって漸く棧橋が完成したのが小学校の桜が足立の春を我物顔に爛漫と咲きはこる四月の末であった。

貯石槽切取工事着工。待つ事久しこの着工。

準備漸く整い清水君を親方にして、直営工事の先陣を承り折柄の五月の薫風を受けて威勢よく切取工事は開始された。

一方鹿島組に於ては、矢の峯おろし風の快き春風に漸く西川埋立箇所締切工事の機は熟し、愈々川付換締切工事へと進捗して行った。

川締切工事は天下の鹿島組と雖も難中の難工事である。川は小さいと雖も油断はならない。丁度川床の一番深い所でもあったりして完全なる締切が容易ならず、ポンプ二台を動員しても押出して来る川水は容易に替らず、之には鹿島組でもほとんど苦労したものであった。

この水替にまごついてゐる中に遂に六月の雨期を迎えて雨は降る、雨は降る。ほとんど毎日晴天の日を見る事のない程十六年は実に雨の多いよく降った年であった。

一度雨が降れば忽ち西川は増水する。締切は水

没する。締切の上に取付けた唯一の虎の子のポンプは流される。雨が漸く止んで水が引きポンプを引揚げて、掃除をして運転するまでに幾日もかゝる。やっとポンプの発動機がポンポンと言ひ出すと又雨が降る。(註 当時はまだ動力線がなかったため、やむなく発動機を使っていた)又ポンプは流される。こんなつまらぬ事を何度繰返したかわからない。皮肉にも発動機がポンポンと言ひ出したらきまって雨が降り出す。まことに始末の悪いものであった。

部落の人たちがこの鹿島組の水替作業を称して曰く、『日本で三番目の馬鹿』と。

(註 今迄日本に二番目の馬鹿まであって三番目の馬鹿が見つからなかったが、之で三番目の馬鹿が出来たと言う事であった)

* * *

電気くる炬燵と蚊帳の夢いくと
五月から六月にかけて建設用の各資材、機械器具類は続々と足立駅へ到着した。
当時はまだ側線が出来ていないので、重量物の運搬も足立駅より県道を廻って『カグラサン』によって、よつちりよつちり運んだものであった。当時として一番骨の折れたのは、コムブレッサー(一〇〇馬力)を正面に運搬据付する事だった。まるで道のない処を『カグラサン』によって、無理矢理に引張り上げて第一コムブレッサーは据付けられた。
此の頃変電所設備は焦眉の急として急がれていた。敷地工事の終るのを待ちきれぬ様にして、川西組によって建物は急がれ、屋外鉄構等の設備の基礎工事は進み、蛸の化け物^{ばけもの}みたいな日立の変圧器(二〇〇K.V.A)も三台とも次々に運んでは据付けられ、屋外鉄構も運んでは組立てられた。出

来上った建物の内部では、井上電機の配電盤の組立、取付に余念がなかった。

一方では中国配電会社に工事依頼中の新見―足立間の送電線工事(特別高圧三三、〇〇〇KV延長十二軒)も架設終り、直営工事の変電所屋内、屋外の諸設備も終了、茲に待望の変電所設備は全く完了した。

愈々送電開始ノ 遂に電力到来ノ

あゝ、この日を幾度夢見た事であろう。社長以下全員の感激にあふれた喜びの瞳に見守れて『スイッチ』は入れられた。

ウーンとうなる変電所特有のうなり。

かくて第一コムブレッサーに送電され、第一コムブレッサーの試運転となり、続いて鑿岩機の試運転となり、何れも上々の首尾にて運転は開始された。

踏み上ること正に大いなる段階。時に春の名残りあとかたもなく、焼けつく様な太陽を頭上に仰

ぐ七月のはじめであった。

* * *

河鹿なくオロ谷遠し軌道作り

電力の到来と併行して、貯石槽切取工事に先だつて着工していた火薬庫新設工事も、土工は清水組、建築は川西組の手によってそれぞれ竣工。ここに爆薬三〇〇箱(六挺七五〇疋)収容の火薬庫は完成し、この火薬庫の新設によって大量の爆薬は購入された。

電力と火薬。この二つの大きな推進力の実現によって現場は大いに活気づいた。そして工事は愈々本格的段階へと進展して行った。

貯石槽切取の清水組と対抗して、岩崎組によって採掘根本の方針たる鳩岡―オロ谷を結ぶ隧道工事の前衛工事として、先づ正面―鳩岡間の軌道敷切取工事に着工した。

足立石灰の生命はオロ谷採掘場である。そのオ

口谷採掘場に向けて今延長七百米の隧道をぶち抜かんと、その前衛工事に挑みかゝったのである。一山越えたはるか彼方の谷口谷へ、これから真直ぐに一直線の隧道を掘って行くのだ。オロ谷採掘場は丁度あの辺など山の頂上の隧道中心の伐採あとを指さしながら、互にはげまし合いながら鑿岩機のリズムも軽く軌道数は順調に掘鑿されて行った。

* * *

馴れぬ手や麦刈る畑に陽の高く

何と言つても一番急を要するものは住宅の建設である。

川西組によつて準備万端整つて、木組みも終つて建てるばかりにはなつたが、肝心の敷地はまだ田圃で麦が黄色く稔っている始末。六月の中に麦刈取りの請求をしたが、まだ稔っていないから稔るまで待つてくれと言う。七月になつたら流石に稔

っていないとは言わないが、暇がないから急ぐんだつたら会社で麦を刈つてくれと言う。実に始末が悪い。と言う様なわけで、向うが刈ってくれるまで待てないので結局会社で麦刈る事になり、川西統領を真先に私はじめ会社の若い連中を動員して生れてはじめての麦刈りをやって見た。ジリジリ焼けつく様な七月の太陽をまともに受けてむせる様な暑い中を、顔はやけて真赤に汗だくくで真っ裸になつて一日中麦刈りをやったのも今ではなつかしい思出ではある。

かくて社宅敷地（今の中央社宅）の農作物は全部取り除けられて、愈々基礎工事へ棟上げへと進み社員寮を真先に、社員社宅より一棟一棟と建つて行つた。

* * *

みぞれ降るコンクリ打や夜もすがら

雨が多い年だっただけに貯石槽切取工事はなか

なか苦勞が多かつた。突貫に突貫を続けて底部隧道の掘方になる頃は、雨が降つたら一ぱいに水が溜つて、貯石槽ならぬ貯水槽と言つたような有様で清水組も之には悲鳴をあげたものである。

漸くコンクリート工事へと進んで、底部コンクリートを打ち終つて型枠を入れる様になつたが、折角骨折つて大工総動員で組立てた型枠が雨のために側壁の土砂崩壊によつて、一晩のうちに全部潰されるといふ憂き目も見た。

鉄筋加工、組立、コンクリート打と、隧道のコンクリート工事へと進んだのはもう秋の日も寒い十月も終りで、突貫工事のために昼夜兼行で、電燈をつけて徹夜でコンクリート打ちを強行した。足立での十一月はもう寒い。時折は雪さえ混つて時雨れる。漸く打ち終つたコンクリートの養生に余念もなく、そしてコンクリートの完全硬化を待つ間もない様にして直ちに貯石槽内部の張石工事へと進んで行つた。

鉄橋取れば凍りついてる北斗星

鹿島組の側線工事、さしも難工事の埋立箇所、の川締切りの水替も、根掘も終つて護岸擁壁コンクリート工事、漸く順調の途につき、ばう大なコンクリート工事、一段一段と打ち上つて、山を切取つては順次に埋立てられて行つた。

続いて工事は西川橋梁のアバット・ビアの根掘工事へと進展した。今度の川締切りは鹿島組でも前車の轍を踏まぬ様慎重を期し、今度は四番目の馬鹿にならぬ中に根掘は終り、直ちにコンクリート工事は続行されて、アバット・ビアは完成した。

この頃大阪鉄工所にて製作されたスパン、一九米二〇〇のプレートガーダー二連も既に到着。之も鹿島組によつて架設され、引続いて西川橋梁工事最後のコンクリートスラブも打ち終つた。

一方側線敷地切取工事、硬い岩盤を終始手掘によつて発破孔を掘鑿し、難儀をして切取を終り、

土留擁壁コンクリート工事より法面張石工事と敷地工事もすっかり完了した。

愈々難関は埋立箇所、伯備本線橋梁の鉄橋取外し工事である。(註 埋立箇所には伯備本線の鉄橋が三連か、ついで、之を三連とも取外してこの鉄橋を新設伯備本線油野川橋梁の鉄橋へ架設した)

何と言つても現在毎日毎晩走っている伯備本線の鉄橋をぶつ外すのだからなかなか容易ではない。当時の伯備線のダイヤは最終列車が午後十時五十分上り新見行が通過し、始発列車が午前五時二十分下り米子行が通過していたので、其の間僅か六時間はどしか時間が無い。現在通っている鉄道の鉄橋を終列車が通ったあと僅か六時間で、枕条や枕木を取外し、鉄橋をぶつ外して、其のあとを埋立て、軌条や枕木を敷設して朝は一番列車を無事通過させようと云うのだから正に軽業師みたいな、否々それ以上の大冒険な仕事である。

で機械仕掛けの様に素早く枕木は並び、レールは伸びる。忽ち線路は敷設されて行く。現場に待ち備えた誘導機関車は地固めのために徐々に往復すること幾度、其の都度土砂の沈下を補つて茲に作業は全く完了。時に午前五時。

ホッと見て見上げる空には星が現れて、頭上はるかに北斗星も凍りついてるかと思われればかり、思わず寒さに身震いする。何時の間に降りたのか置く霜も白く現場の焚火に映ゆる時、緊張しきつたみんなの前を一番列車が徐行しながら無事に通過した瞬間「ワーッ」と喊声(こゝろ)が湧き上った。それは実に感極まった感情のほとばしりに外ならなかった。

かくて第一回鉄橋取外し工事は終り、一週間づつ間を置いて第二回、第三回と三連の鉄橋取外しは順調に完了したのである。

工事は愈々最後の段階に突入した。

時恰も昭和十六年十二月八日。かしこくも宣戦

折柄凍りつく様な十二月の深夜、全員現場に待機して最終列車が現場を通過するやいなや、線路班によってレールはばらされる。枕木は取外される。愈々鉄橋浮上だ。一同掛声も勇ましく「ヤーファイノ」「ヤーファイ!!」ジャッキは伸びる一寸、二寸。さすが重量の鉄橋もぐんぐん浮いて来る。全員悉く汗また汗。正に血みどろの奮闘である。保線区長は懐中時計を片手に秒、一秒タイムの経過に全神経を集中している。

「ヨッコッッノ」凛然たる号令一下、正に浮き上った鉄橋はそのまゝ、送りジャッキに送られて徐々に横行されて行く。

今迄待ちに待っていた埋立班は此処を先途と懸命に、死者狂いで土砂を運搬する。そこには何の躊躇もなければ何の懸引(かけひ)もない。正に一幅の戦場絵巻である。

時刻は見る間に三時、四時と過ぎて行く。やがて埋立終了。最後の土俵固めを終るやいなやまる

の大詔は降され、真珠湾攻撃に大東亜戦争の火蓋は切つて落された。乾坤一抛、聖戦完遂にと国民の血はいやが上にも湧き上った。そしてその感情はそのまゝ、工事完遂へと火の玉となって拍車がかけられたのである。

正に最後の突撃。社長の突貫命令を受けて、工事進行のスピードメーターはゲージ一ぱいに上げられつ、昭和十六年はあわただしく暮れて行った。

* * *

戦捷に日の丸高し初日の出

昭和十七年元旦。

それは全国民の忘れ得ない喜びの朝であった。ろう。軒並に掲げた日の丸も戦捷の初陽(はつひ)にこの朝、この時ほど力強く美しく映えはためいた朝はない。正月の休みもよそに工事は二日より降り続く雪をおかして直ちに続行された。

既に完成していた新設伯備線油野川橋梁のアバ

ット・ピアに、先に埋立箇所を取外した鉄橋の架設工事は強行された。

そして一月十五日再び凍りつく様な夜を徹して、矢張り走っている油野川橋梁の鉄橋一連を新設橋梁に横行して、十六日未明迄に待望の伯備線は新設油野川橋梁へと切換えられて、従来の油野川橋梁はそのまゝ、側線となって残ったのである。

側線最後の大詰。油野川橋梁コンクリートスラブ工事。ほんとに之が側線最後の仕上げの工事であった。(註 足立駅構内の敷地が狭くて短かいため、伯備本線と側線の分岐線と、安全側線のポイントが旧油野川橋梁上にかかるので、プレートガーダーでは幅員が足りないために已むなく足立駅寄りの一連はコンクリートスラブとなった。)

既にピア改造工事は完成していた。

折しも一月下旬の足立は、ことごとく凍りついてしまう酷寒零下十幾度。とても普通ではコンクリート工事など思いも及ばないこの酷寒の空に、型枠

工事ではあった。

* * *

創業やまたしのぼる、夢のあと

一方直営工事では、年明けて漸く貯石槽の張石工事も過半を終り、どうにか貯石だけは出来る様になったが、肝心の碎石工場はまだ基礎工事も出来ていない。貯石槽の上家もなければコンベヤもない。

丁度此の頃、日鉄の広畑製鉄所では海運による石灰石の輸送は極度に逼迫し、遂に石灰石の欠乏となつて熔鉱炉の火を消さねばならぬという騒動で、どんな無理をしても何とかして一日も早く石灰石を送ってくれと日鉄からは矢の催促が来る。

一時は広畑よりトラックを廻して石灰石を運ぶとまで言い出した。(実際トラックで石灰石を足立ー広畑間二〇〇軒に余る道路を輸送するという事は不可能な事ではあるけれども)

工事は進められ、鉄筋は組立てられ、そしてスラブのコンクリート工事は強引に敢行された。遠く浅野セメント会社より取寄せられたベロセメント(急硬化セメント)によって、最後のコンクリートを打終ったのが宵闇せまる一月三十日の日暮れであった。

かくて昭和十五年十一月二十一日着工以来既に一年三ヶ月。突貫また突貫。無理に無理を重ねた側線工事も茲に大いなる実を結び、遂に完成、幾多の悲喜交々の感慨を残して……。

この側線は伯備線分岐点より距離にしては僅か三百六十米(但し三番線だけの長さ)ではあるが、其の間川締切二ヶ所あり、護岸擁壁あり、切取あり、埋立あり、山留め工事に橋梁新設二箇所コンクリートスラブ二箇所。しかも難関をうたわれた鉄橋取外しに本線切替等々実に枚挙に暇なく、流石の鹿島組でも正しく「工事の品評会」だと歎称したのも亦宜なるかな。まことに困難多き側線

兎に角天下の一大事である。戦争に勝つか負けるかの瀬戸際だ。どうしても広畑製鉄所の熔鉱炉の火を消してはならぬ。何とかして石灰石を送り出そうという事になったのである。

応急策として特急にブレーキラッシャー(五〇馬力)を岩下製鋼所より購入して、現在の碎石工場の東側中段に据付け正面の採掘場を採掘して、木製のセミ、チップラーにてシュートで流し、クラッシャーで割って又シュートで貯石する。シュートで貯石するのだからすぐ一ぱいになってつかえるのでシュートの下をトロックで受けて此処で中塊とマイナスサイズとを篩分け、丁度現在のマイナスサイズをトロックで処理する様に中塊もまたトロックで貯石槽の淵をぐるぐる廻って貯石をしたもので現在から見たら実に原始的な貯石をしたものである。

一方側線では積込設備が急がれていたが、何しろ西川橋梁以北(現在の工場場附近)はフケ田の

上を四米に及ぶ埋立地である。(註 貯石槽切取の土砂で此の辺一面及中央社宅敷地まで埋立てられた。)埋立早々そのまゝコンベヤーの基礎も出来ないで急拠大阪より取寄せた長さ四米の鉄筋コンクリートパイプを各基礎毎に二本づ、杭打工事を施工してやっとコンベヤーガーダーの基礎をこさえた。待ちかねた基礎の上にはコンベヤーガーダーの組立、架設に大奮であった。一日一刻を争う突貫工事ではあるが、雪は降り積るし人手は足りないという有様で毎日職員も総動員で降りしきる雪の中をガーダー架設は敢行された。

このガーダー材も鉄材不足のため鉄骨の代りにわざわざ吉野の桧を切出して特別に誂えられたものである。かくてガーダーは架設され、直ちにベルトコンベヤーは第一、第二ともに敷設、上空六本のトロリー線も架設され、ローディングトリッパ―も軌道に乗って、ここに第一コンベヤー一八〇米(七〇〇耗)第二コンベヤー一四〇米(七〇〇

耗)延長三二〇米に亘る貯石槽隧道―側線積込場を結ぶ、積込設備の高架コンベヤー工事が完了したのが二月の六日であった。

側線完成。積込設備完成。臨時設備ながら採掘より貯石までの設備も備い、貯石槽には少々ながら貯石も出来て、あとは油野川橋梁のコンクリートスラブの硬化を待つのみとなった。

一月三十日にコンクリートを打ち上げてより鉄道では、連日数多のコンクリート、テストブロックを破砕しては綿密な強度試験が続行されて、以来十三日目(註 ベロセメントを使用したため)に鉄道より負荷の御許しを得て、丁度二月十一日紀元の佳節を期して貨車は一輛づ、油野川橋梁のスラブの上を静々と側線積込場へと押入れられた。始運転。貨車積込開始。社長の喜び、従業員の喜び。歓喜に震えるみんなの笑顔。幸よき電動機のうちなりとともに川の流れる水にも似て白ダイヤ(石灰石)は一輛また一輛うず高く貨車に積込ま

れて行った。

斯くて輝かしき足立石灰磁業の創業となり、辺境足立の石灰石もここにお国自慢の白ダイヤとして時代の寵児製鉄界を背負って雄々しく世に出たのである。

あゝ大いなる誕生ノ思い出多き建設よ。血のにじむ苦心も報いられ茲に第一期建設は完成し、毎時三五〇瓩の能力を有する貨車積込設備は当時四圍の人々を驚歎せしめたのである。思えばこの日昭和十七年二月十一日こそ足立石灰続く限り創業記念日として、何時までも永久に記念される日であらう。